

計画案の夢

アンビルト・プロジェクト

アトリエCOSMOS

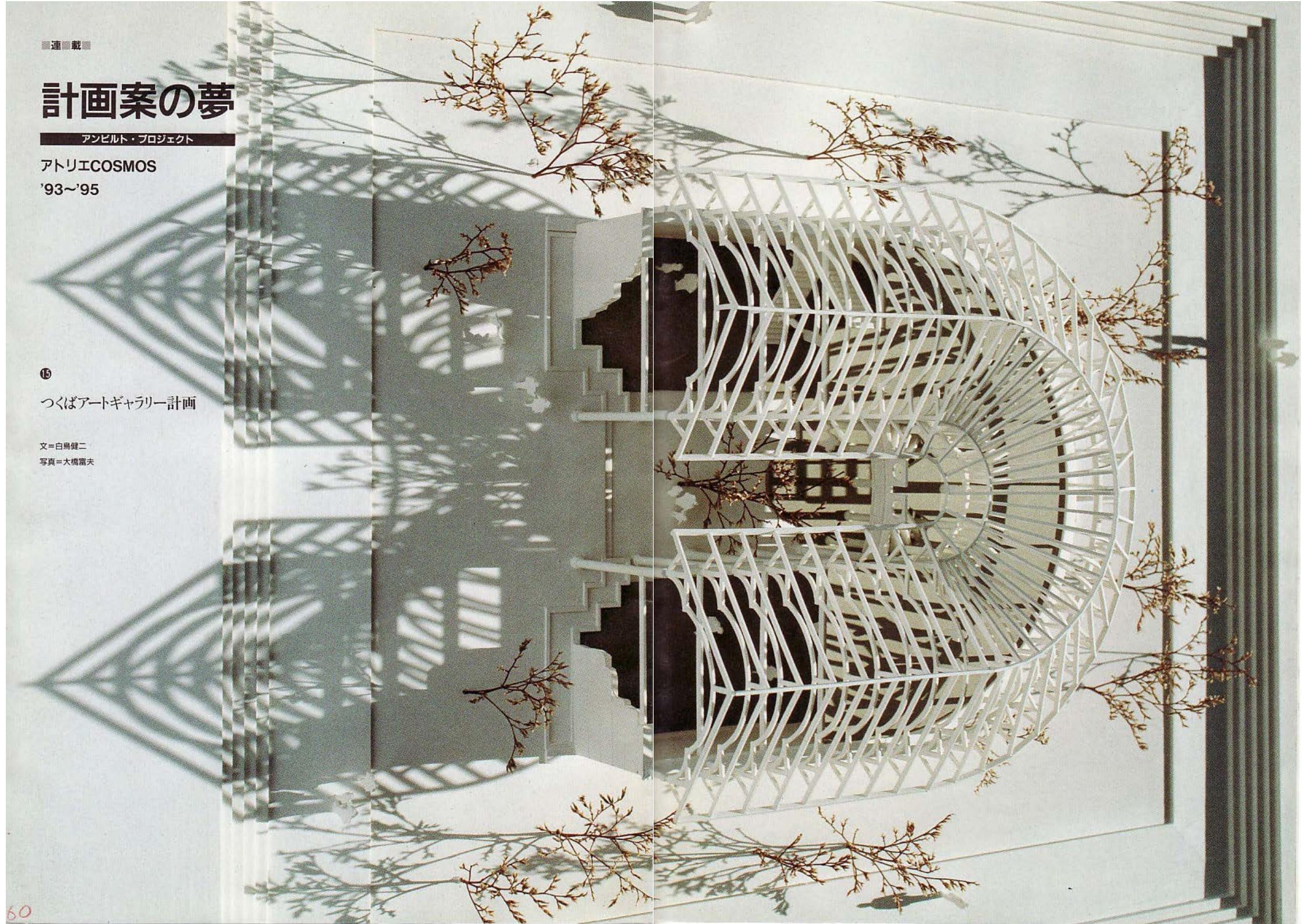
'93~'95

15

つくばアートギャラリー計画

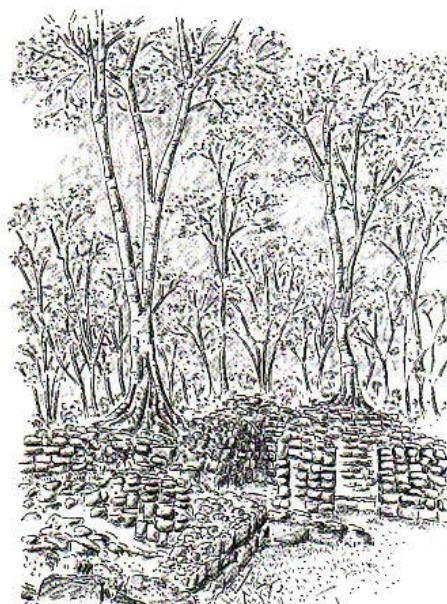
文=白鳥健二

写真=大橋富夫



つくばアートギャラリー計画

—森の中に空想したヒーリングスペース—

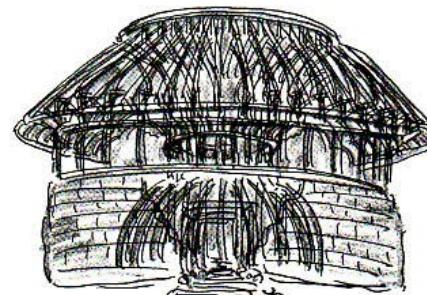


△複雑たる粗石の壁に植物がまつわり、全体が有機化していく
／マヤ道筋・アチャマラコフリンクスにて

バブル崩壊の波は、アトリエCOSMOSに容赦なく押し寄せてくる。前回は、鹿児島伊豆半島の海のむくと消えたアンビルト建築についての話だったが、今回は、茨城県筑波山麓の針葉樹林に、うっかり迷い込んで行方不明となった「つくばアートギャラリー計画」の話だ。

設計の依頼者はコンピューター関連企業の若き事業家。海外に多くの事業所を持つハイテク産業の中堅メーカーで、パリパリのエリート経営者である。

この種の企業は常に新しい技術革新の荒波にもまれ、おまけに事業そのものが国際化競争場の動向にいつも晒されている。彼は、海外にある自社工場を定期的に点検するため、ぐるっと世界一周して日本に帰ってくる。しばらくするとまた出掛けで行くというモーレツ型の経営者である。



△模型スケッチ／正面玄関側

あり、しかもワンマン経営である。一氣のせいか、この人の後姿にはいつも孤独な影がつきまとっていた。

ここ「つくばの森」は、本人の生れ故郷であると同時に本社にも近く、帰國すると樹海奥深く入っては、長旅の疲労を癒していたらしい。そんなある日のこと、私は森に呼ばれ、この実業家が長年心あたためていた建物のイメージの一部始終を見くことになった。

美術愛好家でもあるこの人にとつての拠り所、それは海外のどこでもない。会社でもない、もしかしたら家庭でもない。彼はつくばの森の平地林の真中に、私的でしかもニュートラルな空間を空想している。海外のあちこちで手に入れたアートコレクションを並べ、ここで一人、秘かな時を過ごす。こんなイメージなのだろうか。

アメリカにはこういう話はよくある。いわゆるアーティストドリームというやつである。巨万の財を成したテキサスの大石油王は、ルイス・カーンに設計を依頼。巨財をそそり投じてキンベル美術館という、あの歴史的名建築を世に送り出した。美術愛好家の億万長者と、世界における最も力のある建築家との出会いが、未来への遺産を残したのである。

話はついで大きくなってしまったが、「つくばアートギャラリー」の場合は、モーレツな若き実業家がささやかなジャパンドリームを企てるのである。こちらは夢の実現のために、巨財を投じるとはいからず、資金のすべてを銀行融資に頼ったのである。答はノーと出てしまった。世界の名画が何かを投資目的で買うならオッケーだが、「森の中のヒーリングスペース」などというワケの分らぬ買物はダメなのそうだ。しかも銀行にとって、どこの誰かも分らぬ建築家が背後についている。



増々ワケが分らないのである。

それはともかく、この脆弱なるジャパンドリームは、その後の為替の乱高下という不安定な経済要因も加わり、いつも簡単に崩れ去ったのである。着工の日取りまで具体化しようとしていた矢先の出来事であった。

「森の木陰でゴロッと横になる。ゴロッと横になってじ～っと空を見る。」

私のまわりの針葉樹は天に向かって直線に伸びている。地面の四方八方から天に向かって一直線に伸びている。大樹の幹は大枝に分れ、更に小枝に分れて、最後に微細な針葉に移行していく。枝葉はとなりの大樹の枝葉と交わり、区別が付かなく、一緒にくなっている。

森の木陰で私は今、横になっている。ゴロッと横になってじ～っと空を見ている。

微細な枝葉の向こうに真青な秋空が広がっている。秋空を背景に

真白なちぎれ雲がゆっくりと動いている。右から左へ移動していく。ボ～としながら雲の行方を追いかけている。雲の行方を追いかけているうちに、私の目の前に森全体がゆっくりと建築空間に変身していく。天窓の向うに見える真青な秋空……。その天窓から差し込む光は、微細な木組みの構造エレメントを通して床や壁に、キラキラとうごめくやさしい木洩日を落す。風にヨソヨソとなびく無数の木洩日の光と影に身をまかせながら私は今、ウトウトしている。誰からも彼からも離れて、こんな空間でボ～としながら秘かな時を過す。森の奥深いこんな場所に、私的な空間があったなら……と思うのはあの人だけではないはず。

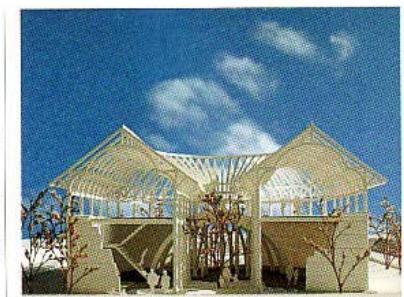
ゴロッしながら勝手な想像をしているうちに、私の背中は地面にすっかり馴じんでいる。地面は、私の全体重をしっかりと受け止めてくれている。うへん、何んという心地良さだろう。このまま立去るのがつらい。

建物は全体が馬蹄形をしている。1階の外周はRC造による自立した2枚の連続壁。奥深いこの森にずっと昔から存在しつづけている魔窟のような壁。この確固たる2枚の壁に微細な木組みの架構が植物のようにまつわりついていく。長い時間をかけてお互いに有機化していく。硬質で、ソリッドな2枚の連続壁と、それにまつわり、もたれかかる微細な木組みとの二つの異なったエレメントが同時に存在し建築空間化していく。

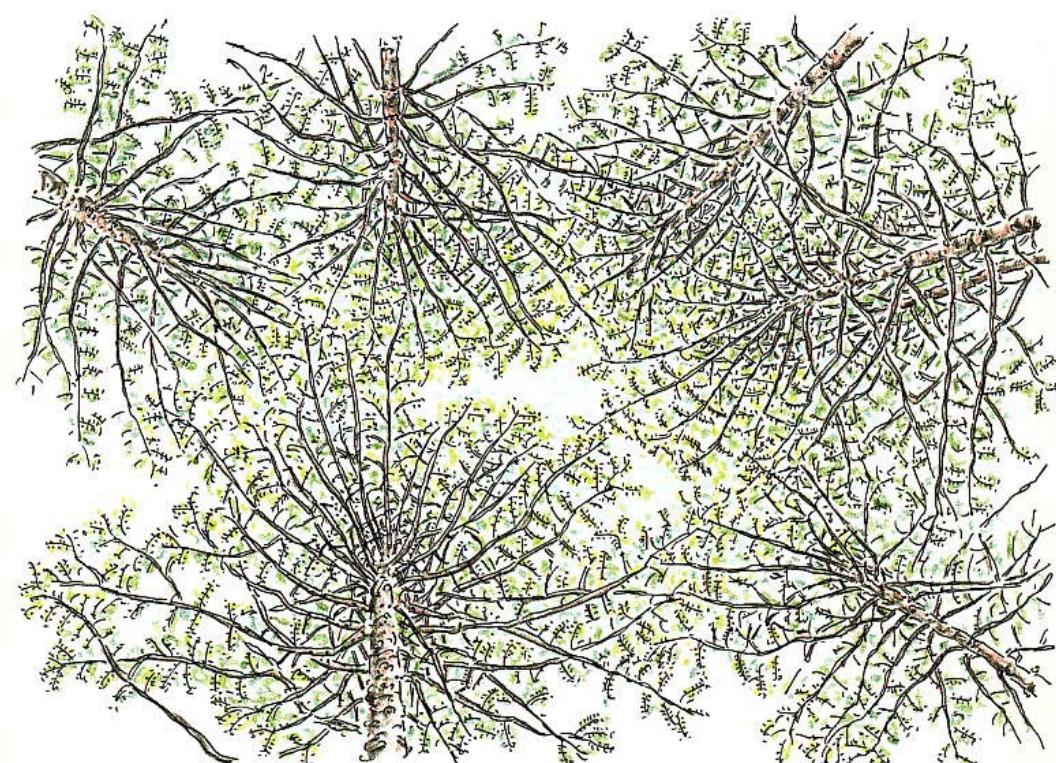
森の中に長い間置き去りにされていた壁、そんな幻の壁のイメージがこのギャラリーを現実化するはずであったのだが……。

【資料】

森の木陰でゴロッと横になる。森全体が私の目の前に建築空間にゆっくりと変身していく



▲模型写真／中庭より ▾模型写真／小屋組詳細



△森の木陰でゴロッと横になる。森全体が私の目の前に建築空間にゆっくりと変身していく